HEAVEN'S DRIVE -the ENGAGE diabols-

達郎吉宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＥＡＶＥＮ'Ｓ　ＤＲＩＶＥ　－ｔｈｅ　ＥＮＧＡＧＥ　ｄｉａｂｏｌｓ－

【Ｎコード】
Ｎ７１２０Ｃ

【作者名】
達郎吉宗

【あらすじ】
機械化した悪魔。それを狩る天使。１人の少年が戦いの渦に巻き込まれ、ヒトの理を超えた“力”を手に入れた。少年は天使にして、騎士にして、光にして、救世主。

第零節　回想ーアシドリー

雲海の夜闇に浮かぶ、銀色の光を放つ月。黒に染まりつつある雲を纏い、現実から切り離された世界を創り出していた。

静寂が続くかと思われたが、2本の光条が夜空を2分した。

互いに複雑に舞ながら激突し合い、光が弾けた。片方の光が力を失ったように、地上に向けて墜落しだした。雲の中を貫け、下は都会のネオンの煌きの星空だった。

摩天楼の屋上に落ち、コンクリートに蜘蛛の巣の紋様を刻んだ。

それを追う様に、もう片方の光が舞い降りた。その動きは最初、質量を感じさせなかったが、ゆっくりと動く様は充分に人間的だった。

その姿は西洋の中世に使用されていた、白銀の板金鎧（プレイトメール）の格好。それは全身を覆う儀礼用ではなく、力強さを強調した白兵に特化した風貌だ。所々に金色のラインが奔り、印象に残り易い縁取りをしている。頭はやや東洋気味の兜と、鋭いツイン・アイのフェイスカバーを付けている。

その手に握られているのは、身の丈を超える程の大剣。異様に幅が広く、鉄塊を物語る鋼色が、自らが力の塊である事を主張していた。それに反して刀身には、十字架か翼を広げた鳥のレリーフが彫られている。

その背からは、雄大な翼が広がっていた。

その姿は騎士のようであり、天使のようでもあった。

土埃が晴れ、亀裂の中央の物体が見えてきた。

霊長類的なフォルムだが、ホモサピエンスよりもゴリラに近い。全身に装甲板を思わせる金属を纏い、隙間からは生物的な筋肉が見える。だが所々、人工的な配線や、有機的なチューブが見受けられる。胸部から腹部へ斜めに奔る傷からは、暖色系の火花と冷色系のスパークが出現する。鋭角的な顎と、異様に突き出した額も奇妙だが、切れ込みの様な細い目から漏れる光も不気味だ。

天使とも騎士ともつかない者は足を進め、大剣を振り上げた。上段から斜めに斬り下ろし、断ち切った。血振りの様に大剣を払い、背を向けた。

光が弾ける様に膨れ上がると、ホタルの様に光が舞い、霧の様に霧散した。

「終わったようだな」

女性の声と共に、足音が近づいて来る。

アメジストの粉末を混ぜたプラチナブロンドは、一流の金細工師でも作り出せぬ程細く、繊細に背中まで流れている。目は釣りあがり、瞳は蒼。眉は細く、目と同じ角度で上がっている。鼻は小さくも整っており、その下には小さな唇。余り日に当たっていそうもない白い肌を、何処かの学校の制服が包んでいる。胸元は大きく開かれ、豊満な谷間が覗ける。

「早いものだな。お前が“騎士(ナイト)”となって半月。Cランクであれば、私の手助けは無用か・・・これも才能なのか？」

女性が視線を騎士に向けると、全身が眩い光に包まれた。やがて柔らかな羽が舞うように、光が風に流されていった。

現れたのは、少年だった。

茶色い髪は癖が少し強いのか、外側に向かってやや跳ね気味だ。目は大きく、瞳は翠。眉は少し太く、見方では意思の強さを垣間見せる。肌の色は典型的な東洋人で、身長の割りに華奢な印象を受ける。彼も学校の制服らしき物を着ており、同年代の少年達にしては童顔の顔は、どこか純朴そうな印象を与える。

「・・・天国に、逝けたかな？」

「前にも言った通り、奴らが『輪廻の環』に加わる事は無い。私達が倒すのは、悪魔。それも、機械の体を受け、物理となったモノ達だ」

少年の呟きに女性は冷たく返し、ドアの方に足を進めた。

「明日も学校なんだ。今日は早く帰って寝るぞ、恵」

ノブを捻って暗闇の向こうに消えた女性を見送ると、少年は右手の中の懐中時計に視線を落とした。猛禽類を思わせる顔に、翼を模った縁周り。文字盤には英数字が刻まれ、現在の時間が示されている。

「もう、半月になるのか・・・」

第零節　回想ーアシドリー（後書き）

初めまして、達郎吉宗です。

今回は第零節、言うなれば序章みたいなものです。読まれた方は分かるかもしれませんが、本編が始まってから時間が経過しています。バトル物である事を強調したかったので、こうしました。

次の第一節・二節は事の始まりになり、第三節くらいから主時間に戻ります（多分）。

駄目物語にならぬよう心がけますので、末永く見守ってくださいませ。

第一節　天使ーキシー

キーンコーン、カーンコーン

チャイムと共に、今日の学生としての1日に終わりが告げられた。教室の前列から3番目、窓際の席に座っていた少年が、カバンの中に教科書を詰め込んでいた。

「け～い！どっか寄ってこうぜ！」

後の席から、友達の浅野が呼びかけた。

「ごめん。今日は、ばぁちゃんのお店の手伝いなんだ」

「そっか・・・んじゃ、俺行くから」

彼は席から離れて教室を出ると、待っていた友人達と廊下を歩いて行った。

誘われても断ってしまうのは、いつもの事。別に彼らと遊ぶのが嫌いなのではなく、忙しいのだ。故に帰宅部で、部活動はやっていない。

話し声がそこら中から聴こえる中、恵はカバンを持って席を立った。

僕は将陵恵（まさおかけい）。今年の秋に17歳になる、高校生。県立西浦第一高

校２－Ａ在籍。

両親は僕が幼稚園に入る前に他界して、母方のばぁちゃんに育てられた。死んだじいちゃんと始めた小料理屋を切り盛りしており、僕も一緒に働いている。

近所では名の知れた有名人で、その理由はというと・・・

「だだいまぁ～」

暖簾の掛かった戸を開けて、恵は店舗兼住居の玄関を潜った。

「あら、意外と早かったですね？おかえりなさい、恵」

大分色の薄い癖の無い髪が、腰まで長く伸びている。目は釣り上がり気味だが、決して気の強そうな感じはしない。顔の彫りは深く、余り東洋人な感じがしない。鼻梁も高く、万人に理知的な印象を持たれるだろう。しかもこの上なく若く、誰も６０に手が届くとは誰も思うまい。

将陵克美（まさおかかつみ）。恵の祖母にして、彼の育ての親だ。

「何か手伝う？皮むきならやるよ」

「その前に、カバンを部屋に置いてきなさい。それから仕事をしてもらいます」

克美はカウンターから顔を出し、２階へ登る階段を視線で指した。

菜箸を持った右手は、アルミ箔で落し蓋を突いている。体が動くたびに、薄紫の上着の左袖が靡く。

克美の左腕は、肘から下が無い。

恵を引き取った時から、彼女の左腕はなかった。本人に直接聞いた事はないが、常連のおじさん連中は事故だの抗争だの、勝手な憶測を立てていた。

片腕しかない祖母の仕事を、恵は幼い頃から手伝っていた。最初は包丁を持つ事など許してもらえなかったが、今は皮むきが自分の仕事になっている。

2階の自室にカバンを置き、学ランをハンガーに引っ掛けて店に降りて来た。エプロンを着てYシャツの袖を捲り上げて、先ずはサトイモの皮むきから始める。

5時半に店を開けると町内のおじさん達や、仕事終わりのサラリーマン達が入って来る。

「ばぁちゃん。生2丁に、刺身2皿。枝豆2つよろしく」

「はい。これはキンメの煮付けです。それと、お皿も洗ってください」

「分かった」

基本的には店の主の美貌も相まって、客の入りは上場だ。たまに入店してくるOL達の目当ては孫息子だったりするもんなのだから、将陵家は世話ない家系だ。

９時には店を閉め、後片付けを始める。小料理屋にしてはやや早い店仕舞いだが、恵の性格上最後まで手伝ってしまうので、克美なりの配慮だった。

恵はゴミを詰め込んだ黒いビニール袋の口を縛り、裏口の外に置いてあるポリバケツに放り込んだ。

「う～ん・・・ん？」

凝り固まった腰を伸ばして空を見上げると、奇妙なモノが視界に入った。

夜空を尾を引きながら流れて行くので、一瞬流れ星かと思った。だがいつまでも消えず、確実に地表に向けて落下している。

「あの辺って、確か『妖怪工場』・・・」

学校の裏山に中にある、廃墟と化している工場。夏には絶好の肝試しスポットで、西浦高校の生徒ではその気味悪さ故に『妖怪工場』で通ってしまう。

気になって走り出そうとすると、タイミング良く戸口が開いた。

「恵、こんな夜遅くに、何処へ行くんですか？」

克美が半身を出して呼び止めると、恵は肩越しに振り返った。

「ごめん、ばぁちゃん。チョッと学校に忘れ物しちゃったから、取りに行ってくるね。戸締りは僕がしておくから、寝てていいからね。

じゃ」

走り出すと後ろの方で祖母の声が聞こえるが、恵は振り返らずに入って行った。

人の手が入れられていない藪の中を掻き分け、恵は廃墟が確認出来る位置までやって来た。来る途中に何箇所もショートカットしたので、思いの他早かった。

体力テストは学校ランキング2年連続1位なのに帰宅部。何人のスポーツ部のキャプテン達に、入部を懇願された事か・・・

月明かりを頼りに入ると、中は殺風景なものだった。錆びた鉄の臭いが時々鼻に届くが、取り立てて変わった所は何もなかった。塗装の剥がれた階段を上って、2階へと出た。辺りを見渡すと、ある1箇所に釘付けとなった。

天井が破れ、銀色の月明かりに照らされる床に、人が横たわっていた。

恵は知らず知らずの内に足を進め、その顔を覗き込んだ。

「・・・女の人だ」

倒れていた女性を負ぶって、恵は自宅に戻った。忍び足で自室に入り、布団に彼女を寝かせる。

月明かりでは良く分からなかったが、蛍光灯に照らされてその容姿に驚いた。整った顔や、紫の混じった銀髪は東洋人ぽくない。服装も奇妙で、ＲＰＧで女性キャラが着ている膝の見えるまでに短い、紺色のチェニックだ。

「綺麗な人・・・」

布団の横に座る恵は、不意にそんな言葉を漏らした。

顔に当たる光で、意識を深い所から引き上げられた。

目を開けて最初に視界に入ってきたのは、見知らぬ天井だった。

「・・・・・・」

恐らく1分ほど、瞬きもろくにせずに固まっていたのだろう。首を動かし、周囲の状況を確かめた。右側に首を動かすと、人物を捉えた。

壁に背を預け、寝息を立てている少年だった。その寝顔は幼く、見るからに純朴そうだ。

「――――何処だ？」

体を起こす事なく、誰とも無しに尋ねてしまった。

「うん～～～～～～～っ」

数分の間を置いて、少年が目覚めたようだ。両手を挙げて背筋を伸ばし、盛大に欠伸をする。

「・・・何だか、背中が痛いなぁ」

ボキボキと骨を鳴らし終えると、少年は布団の中の住人に視線を向けた。

「あれ？気が付きましたか・・・ってか、僕よりも早く起きてたみたいですね」

苦笑する少年――――恵は、布団の中で驚いている女性に声を掛けた。

「貴様・・・」

「お腹空いてませんか？今ならばぁちゃんも店の方だから、食べ物取ってきますね」

立ち上がって部屋を出ようとする恵に、女性は慌てた様子で起き上がり、声を掛けた。

「おい、貴様！」

「はい？」

「・・・貴様、私が視えるのか？」

訳の分からない問いに首を傾げるが、正直に告げた。

「はい」

何故か驚愕そうな表情をしている女性を不思議に思いながら、恵は襖を閉めた。

タン、タン、タン、タン♪

軽快でリズム良く刻まれる包丁の音。このパーカッションの演奏者はYシャツの袖を捲くり、エプロンを付けた恵だったりする。その様は、主婦ならぬ主夫。

現在は家庭科の時間で、調理実習の真っ最中。周りでは料理などと全く縁の無い生徒達が、右往左往しながら作業を続ける。

「っとに、恵と一緒の班でよかったぜ」

浅野が寄り掛かる様に恵の肩に手を置くと、別の男子が頷く。

「だよなぁ。あんなクロスケハンバーグなんてゴメンだぜ」

親指で示された先には、表面を炭に変えたハンバーグが、白い皿の上で自分の色を主張していた。

「別に、特別上手な訳じゃないよ。店じゃ皮むきしかやってないし、料理だって出した事もないから」

「またまたぁ～、謙遜しちゃってぇ。ほらぁ、見ろよ」

「ん？」

顎で示された方を見えると、２人の女子生徒が手を止めて恵を眺めていた。

「何？如何かしたの？」

「え？」

「あっ・・・その・・・」

「あぁ、包丁の持ち方はそうじゃなくて・・・」

自分の作業を一旦止め、後の回って躊躇う事無く手を重ねた。

「こうやって、包丁を持つ手は動かさないで、野菜を持っている手を動かして・・・如何したの？何だか真っ赤だよ？暑いの？」

耳まで赤く染めた彼女は一言も喋らず、されるがままに手を動かしていた。浅野は恵が切り終えた野菜をひき肉に放り込み、噛み殺し切れない笑みを浮かべていた。

「お前って天然だよな」

「天然？」

首を傾げる恵と女子生徒に、周囲の視線が注がれていた。

キ～ンコ～ン、カ～ンコ～ン

下校のチャイムが鳴り、生徒達が帰路に着く。

「ん～～～～っ。今日は久しぶりに、ブックオフでも寄ろうかな」

背筋を思う存分伸ばした恵は、カバンを担いで席を立つ。今日は店が定休日なので、久しぶりに寄り道が出来る。そして密かな楽しみが、ブックオフでの立ち読み。

意気揚々とドアの方に足を踏み出した瞬間、遠くの方から近づいて来る音に、本能的な危機感を覚えた。

ドドドドドドドドドドドドドッ！！！！

大群の全力疾走行進が、盛大に教室に近づいて来る。

「おっ、かれこれ2週間振りか？恵・・・ん？」

浅野が恵を見たが、そこに彼の姿は無い。視線を窓の下に転じると、ベランダの床の外側から、茶色い毛玉が見えている。

「と云う訳で浅野、僕は帰る」

それだけ告げると、毛玉は落下した。

『将陵ぁーーーーーーっ！！！！』

男共が我先にと教室に突っ込んで、獲物の名を叫んだ。

「将陵ー！今日こそサッカー部に入部してもらおう！！」
「何をー！？奴こそは野球部が貰う！！」
「バカ野郎！アイツにはバスケこそ相応しい！！」
「いや、我がバレーボール部、希代のエースに成る男だ！！」
「違う！空手部でそこ、将陵の才能は活かされるのだ！！」
「いや、柔道部が！」
「いや、剣道部こそが！！」
「アメフト部こそが！！！」
「テニス部が！！！！」

各運動部のキャプテン達が入部届けを持参して、廊下で激しい争奪合戦を繰り広げていた。恵が1年の頃から続く恒例行事なので、この2年生の生徒達は慣れきっているのか、既にアウト・オブ・眼中。

彼らが獲物を逃した事に気付くのは、それから1時間後の事だ。

「困っちゃうんだよねぇ・・・店の手伝いがあるから、部活は出来ないって断ってるのに・・・」

大通りを1人で歩きながら、恵は目的地へ向かっていた。

恵の月のお小遣いは2，000円。今日びの高校生にしては少ないが、特に不満は抱いていないらしい。お金を使わず、古本なので安い値段で売られているブックオフを愛用していた。

赤信号で止まり、青に変わってから歩き出す。平和的な光景の中に混じって歩く恵は、電光掲示板から流れるニュースを目で追っていた。

不意に、近くのビルの窓に、影が映りこんだ。

宙を疾駆する、大柄な影。

「へぇ・・・？」

足を止めて後を視た時、それは恵を見ていた。

ドサッ！！

コンクリートに重い物体が落下し、潰れる音と砕ける音が耳に届き、その後は人工的な音は消え去った。

「あっ・・・あっ・・・」

赤い液体に染まり、自分の足元に転がる物体に、血の気の失せた恵は後ずさった。

「あっ・・・あっ・・・」

逃げ出したいのに、地面に吸い付いた様に足が固まっていた、

「きゃーーーーーーーーーーーーーッ！！！！」

女性の金切り声が、時間の流れを呼び戻した。

濁った目が、恵を写していた。

5時を過ぎても帰らない恵を待っていた克美は、警察からの知らせに耳を疑った。警察署まで来て、孫の引き受けをお願いする電話だった。

「・・・あの、孫が何か？」

≪いえ、そういう補導ではありません。だた事件に巻き込まれまして、何分、精神的にショックを受けているようで・・・≫

濁す刑事の言葉を聞きながら、克美は警察署まで足を運んだ。受付に名前を告げると、担当の刑事が恵の待つ待合室まで案内した。

「電話で事件と仰いましたが、如何いう事でしょうか？」

「そうですね・・・最近頻繁に起こっている、連続殺人事件は？」

「あの、全身切り刻まれたという、あの？」

「そうです。実を言いますと、お孫さんが現場に居まして・・・いえ、疑っているのではありません。周囲の目撃者の話によると、突然彼の目の前に降ってきたそうです」

「降って・・・？」

「我々が駆けつけた時も彼、固まった様に立ち尽くして、口も利けない状況だったので、所持品の生徒手帳から連絡先を調べて、お電

話しました」

「それで、恵は？」

「一応、落ち着きはしたようです。ですが、1人で帰す訳にも行きませんので・・・ココです」

刑事がドアを開けると、そこには椅子に座った恵が、初老の刑事と雑談をしていた。

「ばぁちゃん？」

「おや、来たようだね。それじゃ恵君、今日はお家に帰って、早く寝るんだよ」

席を立つ初老の刑事に、克美は頭を下げた。

「何分、ありがとうございました」

「いえいえ。後日、改めて事件の事を聴く事になりますが、今日は休ませてあげてください。でわ」

2人の刑事が部屋を出ると、恵も自分のカバンを持って立ち上がった。

「・・・帰ろう、ばぁちゃん」

小さく呟くと、恵は黙ってドアを潜った。警察署を出て5分ほどしてから、重苦しく口を開いた。

「――落ちてくる瞬間・・・」

2人の間には、重い沈黙が淀む。

「目が、合ったんだ・・・あの女の人と・・・」

思い出すだけでも、全身に不快な悪寒が這いずり回る。

「その時、ほんの一瞬だけ・・・いいなって、本気でおもちゃったんだ・・・」

自室に入ると、女性は朝のままで畳の上に座っていた。視線をずらすと、手付かずの朝食が置かれていた。

「・・・食べてないんですか？」

「食事は必要ない・・・それより、酷い顔だな？」

何気なく会話を逸らされた事に気付かず、恵は顔に影を作る。

「人が・・・死んで・・・」

「死んだ？」

「警察の人の話じゃ、最近起こっている連続殺人じゃないかって・・・」

女性は口元に手を置き、熟考してから尋ねた。

「その死体・・・血が大量に流れてなかったか？」

「え？まぁ・・・」

「全身から血の気、引いてなかったか？」

何処か鋭ささえ放つ目付きに、恵も流石に不審に思った。

「――貴女は、何なんですか？」

少し低めに告げられた言葉で、２人の間に緊迫した空気が流れた。

リリリリリィィィィ・・・

重苦しい空気を追放したのは、耳に届けられた嫌な声だった。背筋に氷を宛がわれた様に、全身から冷たい汗が吹き出た。

「何、この声・・・？ライオン・・・？」

戸惑う恵から視線を外し、女性は顔を険しく顰めた。

「――来たか！」

女性は布団を跳ね除けて立ち上がり、開け放った窓の縁に足を乗せた。

「あ、チョッと！」

「・・・もう、関わるな」

プラチナブロンドを靡かせて、彼女は飛び出した。

ドゴオオオンッ！！バゴオオオンッ！

爆発したり崩れ落ちたりする音が耳を痛めながらも、恵は真夜中の道路を走っていた。

――――僕は、何をやっているんだ！

あの女性が飛び出した後、恵は不快な声に向かって走って行った。あの様子から見ても、この声に従ってココへ来ているのだろう。

グラウンドを校舎へ向かって横断していると、盛大な音を立てて2階の窓が一斉に砕け散った。

「何が如何なってるんだ！？」

誰でもなく悪態を付き、構内に駆け込んだ。階段を駆け上がって2階に踏み込むと、あの女性の声が聞こえた。

「三爪奔（トライエッジ）！！」

意味不明な言葉を叫んだ途端、壁や天井にスジが奔った。一斉にそれを境に両断され、周囲の構造物が崩れ落ちた。恵も巻き込まれ、思わず声を上げてしまった。

「うわっ！？」

「なっ・・・！？貴様！？」

気付いた女性が罵倒しようとしたが、素早く顔を戻して右手を突き出した。

「嵐咆弾（ハウリングブラスト）！！」

耳障りな音が鼓膜を刺激されると、狭い空間の一箇所に大気が押し寄せた。戦車の砲撃でもされた様に、コンクリートを粉砕していく。

「むぐっ！ゲホッ！ゲホッ・・・！！」

撒き散らされる噴煙に咽返っていると、同色の粒子のカーテンの向こうで『何か』が動いた。

天井に頭が着きそうなまでの巨体。隆々とした腕や脚の筋肉は、それこそ丸太の様に太い。背中を丸めたその姿は、原始的な霊長類を思わせる。

だが聴覚は低い唸り声だけではなく、甲高い音も拾っていた。ギアが変わる時の、金属の擦れる音。高圧の蒸気が抜け出る様な、細く高い音。脚を踏み出す度に鳴る、サスペンションの音。

右側から差し込む光に、胸部の鈍い鋼が反射した。

「機械・・・？」

「奴は悪魔」

「・・・悪魔？」

「機械の体を手に入れ、物理となった連中だ。奴らを『狩る』のが、私に与えられし『業』」

「狩る？」

「・・・私は天使。この世界の『生』と『死』、その均衡を守護する者だ」

猛々しく言い放つと、服の背中の布が盛り上がり、純白の翼が広がった。

「灼角狼（フレイムヴォルフ）！」

三度意味不明な単語と口走ると、彼女の厳然に火柱が上がった。特に火種などは無かったはずなのに、天井とを繋ぐ柱の様に立ち上っている。

――――何だ？夢・・・夢オチ？ドッキリ？看板は・・・？

目の前の現実離れした光景に、恵の脳内は情報飽和状態だった。

火柱は弾け跳び、中から四速歩行のシルエットが出現した。大型の犬の様な外見だが、顔はシャープな上に、筋肉が発達している感じが見て取れる。毛色は赤とオレンジで、微妙に表面が炎の様に揺れている。額からは、ショーテルを思わせる角が伸びている。

『呼んだか？』

「盟約に従い、異形と慣れ果てし魔を滅せよ！」

『承知！』

灼角狼は地面を蹴り、獣らしい咆哮を上げながら疾駆した。壁から天井、再び壁へとバネを犯して跳躍し、悪魔に肉薄した。後ろ足に力を溜め込み、全身を伸ばして肩に牙を突き立て、喰い千切った。

「グアアアアアアアアッ！！！」

太い爪の生えた豪腕を振り回すが、狼は身軽に天井へと逃れ、1回転後ろ側に着地した。腕が振り回される分瓦礫が量産されるが、動きが大振りな為隙が出来易く、金属で覆われていない生身を噛み付かれ、爪で裂かれていた。

「金属の部分が硬すぎる・・・ヴォルフの牙でもダメか・・・」

顔を険しくする女性の後で、恵は開口して押し黙っていた。

灼角狼を相手にする悪魔はなおも腕を振り回し、次第に自分で増やした瓦礫を投げ始めた。変貌した四角い通路を器用に跳ぶ狼に対し、人の形をした2人は避けられなかった。

「うわっ！？」

「クッ！嵐咆弾（ハウリングブラスト）！」

放たれた空気の砲弾が、易々と岩塊を砂へと戻した。消火器から撒き散らされた消化剤の様に、一瞬視界が奪われてしまった。

その一瞬が、命運を別けた。

細かくなった岩の煙を引き裂く様に、豪胆な爪が横に動いた。

鮮血が、恵の頬を塗らした。

そして遅れるように、紺色の生地に更に濃い色を付けた女性が、倒れこんで来た。

煙が晴れた頃、あの炎の狼は消えていた。しばらく呆けていた恵だったが、女性の肩を掴んだ。

「しっかり・・・しっかり!!」

奥歯を噛み締めながら、女性は出血の酷い右腕を強く握った。

――――ダメだ・・・これ以上は可逆時間を越え、転写反転してしまう・・・

絶望的な状況に思考を巡らせていると、急に体が浮き上がった。

「うわっ!?」

「こんのォォォォォォ!!!」

雄叫びを腹の底から吐き出しながら、恵は女性を抱き上げてゴリラ風悪魔に背を向けた。全力疾走で階段を駆け上るも、後から地響きの様な振動が伝わる。

「下ろせ！奴には知能が無い！動けるお前より、捕獲し易い私に喰らいつくはずだ！」

「嫌だ！！」

「命が惜しくはないのか！？」

「誰かを見捨てて生きるだなんて、そんなの嫌だ！！」

屋上のドアを乱暴に開け放ち、恵はフェンスの近くまで走った。

「飛べますよね？」

「何を言っている・・・？」

女性を地面に下ろすと、恵は彼女の傍から離れた。

「少しだけ・・・本当に数秒、アイツを止めます」

少年から告げられた言葉に、女性は怒り心頭した。

「バカ者ッ！奴相手に、何が出来る！人間が如何にか出来る相手じゃないんだぞ！！」

「でも、僕はそうしたいんだ」

「バカだ！貴様は・・・！！」

苦々しく吐き捨てられる言葉に、恵は苦笑を漏らした。

「言われたんです、昔・・・弱い考え方をしろって」

「何の事だ？」

「その時、一番弱い考え方をして、それに反逆して生きろ・・・そうすれば、強い人間で居られるって。今の僕の弱い考えは、貴女を置いて逃げる事です。貴女しか倒せないのなら、貴女は生き残るべきです！」

外と中を隔てていたドアが、紙クズみたいに宙に放りだされた。コンクリートで固められた縁を突き崩し、のっそりとした緩慢な動作で、悪魔は身を捻じ込んだ。

「――――行って下さい」

あんな化け物を目の前にして、怖くないはずが無い。本当は今も、脚の振るえが止まらない。膝が笑って、1歩を踏み出すのにさえ時間を要した。

第1歩を踏み出そうとした時、後から手を捕まれた。振り返れば、彼女が血に濡れた手を伸ばしていた。

「――――“力”があれば、生きられるか？」

強い意思を宿した瞳で、問い正した。

「これは『契約』・・・悪魔を狩る『業』を背負う代わりに、我が力をくれてやる。お前は天使の力を得るが、魂の崩壊を呼び込む事となる・・・それは人としての生を捨て、人とは違う理で生きてゆく事・・・力はお前を孤独にしかしない・・・その覚悟、お前にあ

るか？」

２人の反対側で、巨躯の悪魔は確実に迫っていた。

「――――分かった。結ぶよ、その『契約』。それと、僕は将陵恵」

それが名前だと気付くのに、数秒掛かったようだ。美しい顔に微笑を浮かべると、恵の胸倉を掴んで自分の身を引き上げた。

「私の名はレクティ。お前と『血族』になる者の名だ」

自らをレクティと名乗った彼女は、腕の傷口に自らの唇を当て、口の端から血を流しながら顔を近づけてきた。何をするのか見当がついた時には、行為はなされていた。

舌に金臭い味が乗り、喉の奥へと注ぎ込まれた。嚥下された血は更に、体の深くに浸透していく。

ドクンッ・・・

心臓が、これまで感じた事ない鼓動を打った。

熱いモノが全身を駆け巡り、高揚感と恍惚感が感情を満たし、精神が肉体と魂を完全に噛み合わせた。

そして魂の底で、閃光が炸裂した。

空気が破裂し、周囲を嵐の様な螺旋の風が暴れ回った。

バシュンッ！！

白い尾を引きながら、超絶的な疾さで空へと飛び出した。

「グガ？」

悪魔が頭を上に向けると白煙が踵を返し、流星の様に落下して来た。一瞬、白銀の光が反射した。

カーンッ！ガツンッ！！

音叉の様に反響する金属音が鳴り響き、コンクリートの床が抉れた。ドサリと丸太の様な円柱の物体が落ち、床一面を紫の液体が斑を作った。

右腕を失った悪魔が、口から蜘蛛の糸の様な筋を引き伸ばしながら、あらん限りの絶叫を吐き出した。

白煙が薄まり、人型のシルエットが立ち上がった。巨大な鉄塊の様な大剣を右手に持ち、ゆっくりとした動作で向き直った。

白い翼が、白煙を薙ぎ払った。

「バカな・・・“騎士（ナイト）”だと？」

月の光を浴び、銀色に輝きを増す鎧。右手に携える大剣は、無骨で一切の飾りを廃した機能的な業物。背の中の翼は畳まれ、マントの様に靡いていた。

悪魔は自分の腕を切断した者に、猛禽を思わせる爪を生やした腕

を、怒り任せに棍棒の様に振りかざした。

「あり得ない・・・“召喚師(サマナー)”である私の“力”ではなく、別の属性(アイデンティティー)を発現させたなどと・・・」

騎士は消える様に背後に回り、残った左腕を斬り払った。

「天使を見る事の出来る人間など居ない・・・天使の力を得て、それを行き成り使いこなせる人間など居ない・・・何より、あんな巨大な“騎士(ナイト)”の剣など、見た事が無い！！」

両腕を絶たれた悪魔は、咆哮を上げながら走った。それは獲物に襲い掛かる猛獣ではなく、弱い生物が防衛の為に行う捨て身の様に映った。

騎士は一切臆する素振りも見せず、大剣を握る腕に力を込めた。腕周りが膨れ上がり、急激に筋肉が発達しているのが見て取れる。床を蹴って跳躍し、交差の瞬間に一閃した。

悪魔の巨体の中央に、紫の線が引かれた。それを境に体液が噴出し、体を燃やし尽くして消滅した。

白銀に輝く鎧に、煌きながら舞う焔が鮮やかに反射していた。

「―――白銀の・・・騎士」

この日から、僕は神話の回廊を歩み始めた

血を貪るモノ　それを絶つモノ
ただ、重き刃を振るう
次回　ＨＥＡＶＥＮ'Ｓ　ＤＲＩＶＥ　－ｔｈｅ　ＥＮＧＡＧＥ
ｄｉａｂｏｌｓ－
第二節　悪魔－テキ－
そして皆、誰かの光に成る・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7120c/

HEAVEN'S DRIVE -the ENGAGE diabols-

2011年1月13日06時38分発行